

共同研究 ● ストリート・ウィズダムとローカリティの創出に関する人類学的研究 (2011-2014)

**人類学的思考の核心に迫る試み：ケガレからストリートへ**

本共同研究の設置には、本研究を主宰する筆者自身のインド社会研究での文脈がその経緯の下敷きになっているので、そこから始めたい。

儀礼的なケガレ観念に関する筆者自身のオリジナルな理論提示（「不浄」と「ケガレ」との区別の導入）から、都市ストリート特にインドの巨大都市のストリートの縁辺の歩道空間（支配権力の戦略と社会的弱者の生存をかけた戦術が絡み合う活発な縁辺空間）のあり方へと、筆者の研究対象は推移した。その展開を遡及的に辿り直してみると、結果的に一貫した問題意識の軌跡が現れてきた。すなわち、この一見異なる関心の外装とは裏腹に、その両者（ケガレとストリートの縁辺）の間には＜中心化志向の視点と脱中心化志向の視点との絡み合う抗争 contestation＞という共通した理論的枠組みが貫かれているのである。

村落のケガレ実践も都市の歩道模様も、＜「生活の場」の構築の論理＞というものを考える格好の時空である。そこでは、自己が他者になり、他者が自己になるところで存在を獲得するあり方、それが「ヘテロトピア」（Foucault 1984）としてすでに実在する模様を目撃できる。この生きられる時空の様態が、現代世界を席卷するネオリベラリズムという「システム」に抗して探究されなければならない。それが本研究の目的である。システムによる植民地化が浸透する「生活世界」の現場こそが、現代の問題が集約的に現出している最前線と見定めてのことである。ゆえに、そこで見出されるストリート・ウィズダムは、今を生きる人々全体の共有財産になるに相違ない。

このような目的設定は人類学史の理論的転回などと称して研究の目先を変えてきた類の話ではない。はじめから人類学誕生以来の通奏低音としてあった核心部の目的なのである。短い歴史しかない人類学にあっても、その音を聴き外し随分と迂回してきたのではないだろうか。その歴史をある意味で巻き戻し正しく前に進めるように組み直すために、認識論的支配イデオロギーの一般化（周辺を ambiguity と意味規定するような上空飛行的な視座）への、実存的存在論（人間の存在が ambivalence な情動と共に生きられているという内在的・境界的視点）からの異議申し立てが不可避なのである。

このような「生きられる場」を考えるストリートの人類学的研究の過程で、おのずと浮かび上がってきたのが、広義のストリート現象と見なせる「ローカリティの創出」という問題系である。その意味で、本研究はストリート人類学の第2ラウンドなのである。

**現代格差社会のストリート現象としてのローカリティの創発**

今日、ネオリベラリズムの主導する世界資本主義の浸透は社会に「恒常性の喪失」をもたらしている。しかも、主流社会とアンダークラスという垂直的に分離した「管理型」社会を産出している。アンダークラスや不安定労働者層は、保障

なき世界をストリートに近接して剥き出しで生きる現代の前衛と言える。というのは、優位な社会的地位にある中核の人々さえも現代社会の強い遠心力にいつ弾き飛ばされるかと不安を募らせているからだ。ゆえに、縁辺のストリートを生き抜く人々のぎりぎりの実践知、すなわちストリート・ウィズダムは、今日すべての人々に実は要求されている。世界は疑いなく「ストリート化」してきている。まさにこの世界同時図式が現代の地域社会を翻弄している。それゆえ、今日のローカリティの盛衰は広義の「ストリート」現象と言える。原子力発電所が過疎地に立地するのは痛ましい負のストリート現象に違いないが、東京を筆頭にした大都市中心の社会権力構造が地方に強いている結果である。誘致反対派も賛成派も村や町が生き延びるために苦渋の選択を迫られ、分裂していく。電源三法交付金という巨額の金が地域社会にもたらされ一見勝利に見えて、その実は深い敗北の刻印が子々孫々にわたって押されることになるのだ。

「フローの空間」（Castells 1989）の結節として機能するグローバル・シティというトランスナショナルな権力の強大化の下で、徹底的に周辺化されるローカリティはその生き残りをかけて必死の格闘を余儀なくされている。だからこそ、このようなローカリティをめぐる広義の「ストリート」現象の現実の襲に分け入り繊細な記述分析が求められる。これが本研究の基本目標である。つまり、権力や資本を欠いている、ないしは微弱なため、主流社会のような設計主義は使えない、偶発的なフローから取り出せるあらゆる資源を活用するような、ストリートの戦術的生き延び方が探究されることになるだろう（cf. Sekine 2012）。いわば、ベンヤミンの「敗者」の歴史の概念（ベンヤミン 1993（1982））に習えば、敗北せる場所でのローカリティの生産の現実を活写するのである。

本研究が目指すのは、制度的再帰性を強める現代社会のセーフティネットなき流動性をどのように生き抜いていっただらいいのかという、緊急にして不可避に必要なストリートの実践知を解明することにある。社会下層の直面する問題、そしてそこからさえも脱落してしまったアンダークラスの人々の苦悩は、実は現代社会全体の抱える構造的問題を表現している。それはほとんど解決不能にも見えるほど深刻化してきている。先の原発立地の例に見られるように、ローカリティ（社会関係資本の集積体）が次々と破壊されてきている。阿部年晴の言う「後背地」（阿部 2007）が近代文明によって食べ物にされ解体されていく姿である。それは、ギデンズ流に言えば、実存的不安に抗して安定的に自己のアイデンティティを紡げるような「存在論的安心」の支持基盤（場所）の縮減・消失ということになる（ギデンズ 2005）。これは、階層差を超えた現代社会全体を覆う問題であり、それゆえに、私たち現代社会に生きようとする者は誰もが「新たな共同性の場（ローカリティ）」の創発について取り組まざるをえなくなっている。ある者は浅くナショナリズムに傾倒し、ある者はそれを

コスモポリタニズムに求めるだろう。私たちは、その両極を睨みながらも、そこに認められる超越的視点を脱して、「下からの視点」を徹底する超越論的な構えのうちに、第3の道を探求するだろう。開きつつ閉じ、閉じつつ開く、あるいは異なるままに同を見出し、同のうちに異との繋がりを得る、という動的なローカリティの生成過程、すなわち「新たな共同性」の創発を具体的な事例を通じて解明することになる。さらには、その動的過程を、自己表現（外化）・他者評価（客体化）・自己確認（内化）という他性との対話過程を経るアイデンティティ構築の実践と見定め、その創造過程を支持推進する時空間のデザイン論の解明へと展開できないかと考えている。この他性との対話を支持し援助するデザインを、目下のところ、ヘテロトピア・デザインと冠して目標に置いておくことにしたい。



チェンナイ市の州立病院に近接する好立地の「歩道寺院」。その神の力を頼って、歩道に5世代にわたって住み続けてきた拡大家族の人たち。2012年2月撮影。筆者は2000年から見続けてきている。

### ヘテロトピア・デザインとフォークロア

デザインが計画的意図と結ばれると自己延長的でトップダウンなものとなる。つまり、一義的意味を空間に配分するようなゾーニング型の都市計画や地域計画と親和的なユートピア・デザインとなる。ユートピア・デザインは制度的再帰性を促進し均質空間を高度化する。それは、薄っぺらな自己点検を強要し、その結果個人から自己再帰性の余地（自己発見的な自己変容の機会）を奪っていく。支持基盤は失われ実存的不安が増大し鬱積する。そういう方向に抗するヘテロトピア・デザインとは、ヒューリスティック（自己発見的）な自己再帰性を保証する存在論的安心の場を確保することを狙いにした、いわば下からのデザインである。ギデンズが説くように、人間は他者とのコミットメントの享受の原経験を核にして存在論的安心の場という心的基礎を獲得する。この基礎が、実存的不安を乗り越える自己のメタモルフォーゼを自己発見的に推進していく。この基盤が、他性とのコミットメントへの健全な意欲、社会に対する道徳性を支えることになる。これは言うなれば、人間の生の意欲の核心部に、境界経験があるということである。確認しておくが、境界経験とは、慣習の自明性（自己）と非自明性（他性）の間の緊張関係というダイナミズムすなわちアンビバレンス（両価性）に生きることである。

考えてみれば、各々の社会で人間の生を支えてきた文化の仕掛けとは、結局様々な時空の境界事象（クライシス）のマネジメントであった。他性との直面という自己の限界において生まれるクライシスを乗り越え、他性を組み込み直した新たな自己の誕生を、文化が援助してきた。近代文明はこうした文化を解体し散り散りにしてきたが、それでもその残滓は存在し、往年の文化装置の知恵はなんとか不完全にせよフォークロアとして記憶、記録、伝承されてきた。このようにして、現代社会に伝承されてきたフォークロアは、ヘテロトピア・デザインの宝庫となる可能性が論理的にはある。フォークロアは単に過去の遺物として今にあるわけではない。それは現代の世界の中である種の神話作用（のっぺりとした均質空間化に抗して聖なるものを区分し繋ぎ直す闘い）を作り出すことを曲がりなりにも果たしているのに違いない。デリタ的な意味で「第2の隠蔽の暴力」を暴露する「第3の暴力」の働きが期待されるのである。したがって、そのようなフォークロ

アの、あるいはフォークロア的なものの潜在性・可能性を具体的に掘り起こし現代の文脈により自覚的に表現し直していくことに、本研究は力を傾けることにもなろう。

ストリートとフォークロアは、きっと相性がいいはずである。共に「不在の実在」のうちに他性の到来を待つ生の境界、あるいは「敷居」（メニングハウス 2000）を指し示しているからである。

### 【参考文献】

- 阿部年晴 2007「後背地から……」阿部年晴・小田亮・近藤英俊編著『呪術化するモダニティ—現代アフリカの宗教的实践から』pp. 349-390 風響社。
- ベンヤミン W. 1993-5 (1982)『パサーージュ論』（全5巻）今村仁司訳 岩波書店。
- Castells, Manuel 1989 *The Informational City: Information Technology, Economic Restructuring, and the Urban-Regional Process*. Blackwell
- Foucault, Michel Dits et écrits 1984 *Des espaces autres* (conférence au Cercle d'études architecturales, 14 mars 1967) *Architecture, Mouvement, Continuité* 5: 46-49.
- ギデンズ、アンソニー 2005『モダニティと自己アイデンティティ—後期近代における自己と社会』秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也共訳 ハーベスト社。
- メニングハウス、ヴィンフリート 2000『敷居学 ベンヤミンの神話のパサーージュ』伊藤秀一訳 現代思潮社。
- Sekine, Yasumasa, 2012, *Transnationality, Hope and 'Recombinant Locality': Knowledge as Capital and Resource, South Asia Research* 32(1) (in print)

### せきね やすまさ

関西学院大学社会学部教授。専門は南アジアの文化人類学。著書に *Theories of Pollution*. (ILCAA 1989)、『ケガレの人類学』（東京大学出版会 1995年）、『＜都市的なるもの＞の現在』（編著 東京大学出版会 2004年）、『宗教紛争と差別の人類学』（世界思想社 2006年）、『排除する社会・受容する社会』（編著 吉川弘文館 2007年）、『ストリートの人類学 上巻、下巻』（編著 国立民族学博物館 2009年）、*Pollution, Untouchability and Harijans* (Rawat Publications 2011)、*From Community to Commonality* (Center for Glocal Studies, Seijo University 2011)、『フィールドワーカーズ・ハンドブック』（共編 世界思想社 2011年）など。